

## VII. 外 国 の 山

### 1. アンデス — 1965 —

中野 力

1965年、関西大学創設80周年記念ペルー。アンデス学術調査隊が派遣された。調査隊は医動物班の杉原教授を隊長として、地震学の神月助教授を副隊長に、隊員には考古学教室から久野氏、そして登山班に山岳部O.Bから登攀隊長の日比氏外池内、長谷川の各氏と、探検部O.Bからは近藤、米川の各氏と私が参加した。

調査隊の正式報告書は「ペルー・アンデス学術調査報告書」があり、また関大探検部部報「踏査」第6号にも隊長の御報告がある。

ここでは、往復に約70日を費した中南米の船旅や、約2ヶ月間の登山活動と旅行に要した約2ヶ月の日々の印象を当時の日記からそのまま転記し、「アンデス日記」とさせていただきます。

はじめにこの計画—KUAII. 65—は上記のメンバーにより医動物、考古学両班はペルー各地とボリビアに亘り、地震班はペルー、アルゼンチン、チリーに及び、私の参加した登山班はペルー、ワイワッシュ山群の北部一帯の未登峰を試登するものであった。またこのワイワッシュ山群は日本隊が未だ訪れたこともなく、高い未登峰が多く残されていた山群で、中でも我々の目ざしたシウラ・チコはアンデス山系の未登の最高峰であった。

#### — 日記から —

5月10日 目覚めはすがすがしい。食欲も充分だ。昨日まで続いた船酔気分や頭痛も今はほとんど感じない。北大西洋の波は今日もはてしないで続いている。甲板上でのトレーニングはキビシイ、足が地につかない。揺れるに逆らっては走れない。船について来た海鳥が、きょうもきれいな姿をたのしませてくれる。もうアリューシャンが近いのだろうか、寒さが身にしみる位だ。時間の感覚がはっきりしない。今は昼でも日本ではまだ夜中だろう。船の中は早大のパーティも同乗していて、ブローカンな英

語のレッスンもやる。スペイン語をもり込んだ会話が大阪弁で実にユーモラスだ。

5月20日 船は早朝にロング。ビーチを出たらしく、朝食に起こされたときにはすでに丘は見えなかった。静かな海原をまたいつもの調子ですべっている。「富める国、道路が美しく、車が多い。」これがロサンゼルスの印象だった。朝食後差し入れの「倉田百三」を続む。

5月23日 めざめると既に陽は高く、広大な海にも我々の頭上にも容赦なく照りつける。夜の寝苦しさのためにも、昼は寝ない様につとめなければならない。「健島丸図書館」から文庫を借り、デッキチエアを影へ運んで活字を追う。汗ばんだ体には潮風がいたい。真青な海面に陽が強く反射して不気味にぎらぎらと輝やく。サングラスをとおして潮の陽炎がいろいろなことを話しかけてくるような気がする。

夜デッキで南十字星を見る。きれいな星だ。少し右に傾いて見えるが、南の空に四つ星が十字をなし、くっきりと浮かんでいる。北極星、北斗七星、さそり座も認められる。アカブルコの街が夜空を明るくそめている。

5月29日 南米に入って、2度目の上陸地グワヤキルへは朝食を船で済ませて街に出る。灼熱の太陽が頭を焼くよう感じ。ペナベンチュラとは比較にならぬ程きれいなところだ。税関の建物には南米らしい特有の壁画がある。緑の芝生もきれいだ。バスで街の中央に着く。そこには広場があり、真白で大きなとがった建物が目につく。教会である。食堂をさがして休む。ビールはともかく、鳥めしのまずいこと。前の公園に集まる時間を決めて散る。宝くじ、靴みがき、たばこ等の物売りが多い、道路建物は立派なものが多い。公園には必ず何かの銅像がある。

6月12日 通関は1週間でトラブルもなく済み、食料購入も終え

いよいよリマの街を出発する。街に残す荷物はコンテナに詰め、ペルー新報社長長谷川氏宅に保管をお願いする。

8時の約束にトラックは半時間遅れて来た。荷造りを終え、リマを発ったのは10時半だった。貧民街の側を通り、パンアメリカンハイウェイを突走る。窮屈な座席を出て荷物の上に寝ころぶ。風は強いが気分がよい。砂漠の中を一直線に道は続く。やがてワラスへの道に入ったが、九十九折の道はまわりにサボテンや名の知れぬめずらしい植物が点在し私達の目を楽しませてくれる。すごい谷間をトラックは調子も変えずひた走る。陽が山にかくれた頃、前方に満月が顔を出した。日が暮れてもフォードの調子は変わらない。ワラスへの道と別れるインカワインで休憩する。この高度約4000mなり、月夜にワイワシュの峰々が白く輝く。軽い高山病にかかり、少し眠ってしまった。22時30分ようやくチキアンに着く、荷物番のためトラックの荷の上で寝ることにする。

6月15日 キャラバン2日目。9時半、池内氏とポータのソラノと先発する。朝洗顔のとき、鼻血が少し出た。口びるがいたく、大きな口が開けられない。POCPAから3.5KmのSELICAを通過、PALICAというすばらしいパンパにて昼食をとる。実に雄大な草原だ。土を探集しながら行く。途中ROUDOYを頭上に見て、CUARTEL HUAGIにて設営する。馬、ブーロ合せて35頭のキャラバン。

6月23日 全員で荷揚げをする。今日の荷物は先日よりやや軽く楽だ。テント場を出て少し登ると足元でリスが飛び出す。身軽にピョンピョンはねる様はおどけていて私達をなぐさめてくれる。雲一つない天気に陽が強く照りつけ暑い位だ。小さな岩場を過ぎ草付きの途中で軽い昼食をとる。高度の影響を受けている者もある。前進キャンプに荷を置き、テラスで昼寝をむさぼる。アルゼンチン隊の一人とH氏とプラトーからのルート偵察を兼ねて、ダイレクト尾根の取付点を確認すべく出発、アルゼンチ

ン隊の男はもう一人のパートナをけんかで失い、我々にたよってきたものだ休養充分でコンパスの長い彼はさすがに早い。約1時間半で氷河を横切り取付点の下に出る。下や横から見る氷河より、実際に歩いて上から見おろす氷河はずっと女性的だ。なめらかに雪をかぶってクレバスやセラックをかくし、ほんの少しだけ口が開いているように見える。雪がかなり降ってきた。腹を空かしきって、前進キャンプに戻る。すでにウインパーテントが張られラーメンを作ってくれていた。雪の中を1時間でベースキャンプに着く。I氏のすすめで日本酒を飲めばたちまちまわりだした。Y氏のせっかくのごちそうも喰えずに寝込んでしまった。実に苦しい思いだ。

### 6月29日 ヒリシャンカ・ノルテ アタック

昨夜は岩の小さなテラスで四方をビレーしてビパークした。H氏と二人して今日の頂上慢歩を夢みながら寒さをしのいだ。5時半ツェルトを払うと東の空遠くアマゾン方面の高原が既に白んでいた。まずまずの天気だ。真上のヒリシャンカ・ノルテはガスをまとい、姿を見せない。氷からレモンティとミルクを作つて朝食にする。7時45分陽がガスのすきまからもれてきた。わずかな食糧と登攀用具を詰め込んで出発する。岩場を少し行き、昨日フィックスした氷壁にかかる。約40mの氷はフィックスをたよりに登る。ここから半ピッチで雪のプラトーに出る。ここからスタカットで行き、9時難関の氷のハング帯に出くわす。この先はルート工作が出来ていない。稜線への高度差は200m位と思われる。バンド状の氷にルートを求め約1時間ねばつて乗越す。このハング帯には足より太いツララが垂れ下り、時には氷柱になっている。

夜の寒さとは裏腹に昼の暑さもたまらない。次の氷壁もトップで登る。しかし、60度位の氷壁に雪がくさって実に登りづらい。アイゼンの爪が一つはずれるとそのまま一直線、千余の氷河へガッポリ、下にはクレバスが大きな口を開けているはずだ。ステップを切り40mのピッチに1時間程かかる。ずいぶん揚げたはずのフィックス用ロープがなくなった。メインザイルだけ

で、こんどは H 氏がトップに立つ。北面にさす強烈な太陽が氷の上についた雪をとかす。急俊な壁もあと半ピッチで小さな雪のテラスだ。そして最後の 1 ピッチで稜線だ。

B.C と A.C と交信。残念だが後退だフィックスザイルがなく、雪が悪すぎる。仕方あるまい。さっきのビレー点に 2 人してほんやりあたりをながめていた。ルビーやエメラルドに輝く真昼の星は今は無い。パイ缶を開け、元気を出して下降する。フィックスザイルを撤収しながらビバークポイントには 4 時に着く。Y. S 氏の出迎えを受け A.C に降る。無事に降りたことを感謝しながら登山の難しさをしみじみと想った。5000m の岩陰で土を採取する。

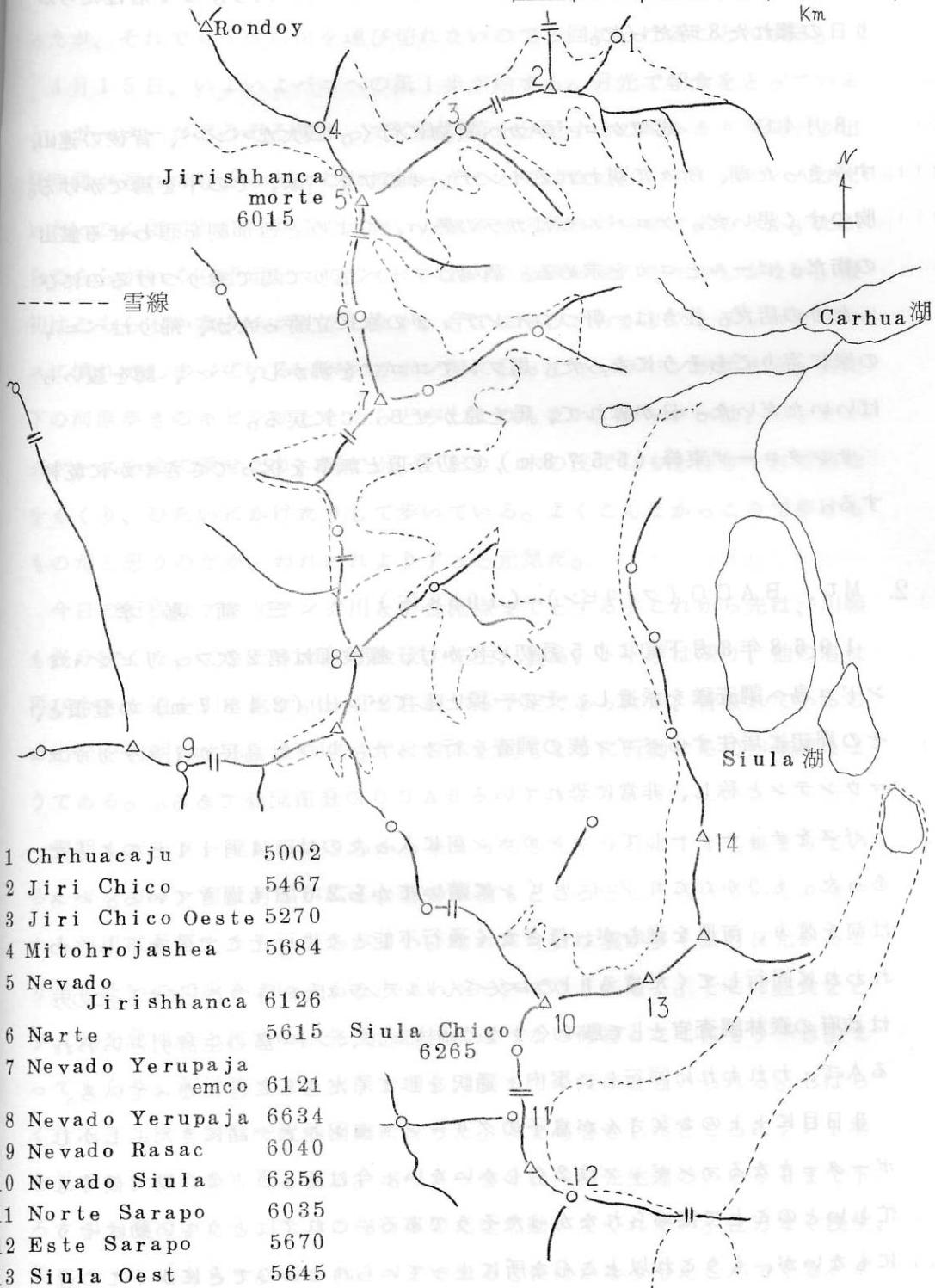
7月5日 隊長と K 氏がポリビアへ向かわれ、H 氏とソラノが野菜購入に行っていただいている間、H. I. Y の各氏と私の四人でヒリシャンカ。チコをねらうことになった。

朝、昨夜の寿司のねたを利用して、H 氏がのり巻きを作ってくださった。一昨日の偵察の結果、今日の行動は東北面の氷河の末端までということで、12 時の出発である。食糧を豊富に荷揚げして、うんとめしを喰う計画だ。予定地には 4 時頃着く。H. I 両氏が氷河の上部を偵察する間にモレーンの岩棚にテント地を求めるべく整地する。小さなツェルトに四人がならんで寝そべる。雲がしだいに切れて、月夜にアマゾンの彼方が望める。

8月1日 風は強いが実に久し振りの快晴だ。稜線のビバーク地からシウラのアタックに向った I. H 両氏を C.II から H 氏と追う。昨日苦心した雪面もフィックスのおかげで難なく乗越し、さらにフィックスを伸ばす。稜線の雪面を 8 ピッチ程行った。頂上アタックを断念して下山に向う 2 名に出くわす。話を聞けば、その先はすごいらしい。交代してアタックしてみたいが、我々の手に負える代物ではなさそうだ。4 人が下山に向ったのは 12 時頃だ。いやな雪壁をフィックスを使って下降だ。サポートに C.II へ登ったソラノと共に C.II を撤収する。例の雪面のフィックスを撤収するのが大変だ。

ペルーアンデスワイワシュ山群概念図

0 0.5 1 2 3 Km



5時やっとプラトーに降り着き、Y氏と3人でC.Iに向う。C.I着はたっぷり日の暮れた8時だった。

8月4日 馬でケロバルカへ買物に行く。広大なパンペ、背後の連山、すみきった湖、所々に現われるインディオのアドベ家、その中を馬でかける。胸のすぐ思いだ。ケロバルカはガラの悪い、ちょうど西部劇を想わせる鉱山の街だ。ビールとコカを求める。酒場はアドベ造りで馬で乗りつけるのにぴったりの店だ。往きは一軒づつインディオの家に立寄ったが、帰りはペニャの家に寄りごちそうになった。馬フンでココアを沸かし、パパ、鱈を腹いっぱいいただいた。日が暮れて、馬を急がせB.Cに戻る。

サンタローザ東峰(5578m)の初登頂と無事を祝ってささやかに乾杯する。

## 2. Mt. BACO(フィリピン)(1968年) 三浦嘉孝

1968年3月下旬より5月初めにかけ、探検部は第2次フィリピン・ミンドロ島へ調査隊を派遣し、その一環としてバコ山(2487m)の登頂と、その周辺に居住するバゴン族の調査を行なった。以下は島民がミステリアス・マウンテンと称し、非常に恐れているBACOの登頂記録である。

バスをチャーターして、ポンガポン河に入ったのは、4月11日のことであった。もうかれこれフィリピンに着いてから20日も過ぎている。バスは河を渡り、河原を進むが、ほどなく通行不能となり、そこで荷を下し、われわれに同行してくださるトトのお父さんトルデシラス氏を待つことにする。この方は政府の森林調査官として島をくまなく歩き廻り、ミンドロ島の生辞引といわれる人で、われわれに同行し、案内、通訳をしてくださることになっている。

3日目にトトのお父さんが息子のグリーン・セシルと一緒にきた。しかしポーターとなるマンギャンは2名しかいない。今はちょうど農作期で彼等も忙しいとのことで集められなかつたそである。これではとうてい動けそうにもないが、もうこれ以上こんな所に止っていられないのとてかくこの近